



滞日外国人留学生の家族の支援-ボランティア団体 「KOKORO-NET in 神戸」の活動事例

渡部, 留美

(Citation)

研究論叢, 16:35-43

(Issue Date)

2009-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81008657>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008657>



滞日外国人留学生の家族の支援

—ボランティア団体「KOKORO-NET in 神戸」の活動事例—

渡部留美（名古屋大学国際交流協力推進本部）

1. はじめに

2008年5月現在、日本に滞在する外国人留学生¹は、123,829人となっており、日本政府による2020年までに留学生受け入れを30万人にするいわゆる「30万人計画」に基づき、更なる留学生の増加が見込まれている²。

留学生のなかには既婚者であったり、日本留学をきっかけとして結婚する者もいる。多くの者が、配偶者、子供などの家族を伴って来日、あるいは、日本での自分の生活基盤が安定してから家族を呼び寄せている。

滞日外国人留学生が帯同する家族については、これまでいくつかの調査研究によって、留学生及びその家族が抱える問題、彼らのニーズなどが明らかにされている。それらは、日本語能力の問題、就業の問題、不適応、医療情報不足、子供の教育の問題などである（白土、1993；大橋、1997；渡部2008など）。

留学生家族の存在を早くから認識していた受け入れ大学機関では、留学生配偶者を留学生同様、サポート、ケアすべき対象と捉え、日本語クラスを中心としたサービスを提供しているケースも昨今少なくない（北澤、1996；小山・古賀、1997；岡崎、1999；佐藤、2003；田北、2004）。しかしながら、配偶者の支援を大学の正規の予算、

人員で行うことは容易ではなく、学生や地域住民などのボランティアが関わっている事例もみられる。ボランティアの活用については、支援を受ける側にとって有益だけでなく、ボランティアがボランティア活動によって得られる成果が期待できるなど、双方にとってプラスの効果が働くことが実証されており（妹尾、2008；大坂、2008など）、肯定的な見方がある。

しかし一方で、留学生や彼らの家族のためのボランティア活動については、支援活動の質・内容についての問題があり、活動に参加しない配偶者がいたり（渡部、2008）、ボランティアがサポート活動より英会話に興味を持っており困ったときに役に立たない（大橋、1997）、「日本人による留学生や家族のためのボランティア活動はごく一部にすぎず、不十分であり、役に立たず、形式的である（p.97）」（マーフィ重松・白土、2001）などといった厳しい意見が出ていることも事実としてある。

大西（2007）は、ボランティアの果たす役割、留学生との相互作用など国際交流への貢献度については、調査研究を行うことにより明らかにしたり、地域と大学が連携しニーズにあった効果的なプログラムの開発および提供を実践することが必要となると述べており、これらの課題についての実

践、研究はほとんどなされていないのが現状である。

本稿では、筆者もボランティアとして参加している神戸地区を中心に活動している留学生（及び研究者、教員）の家族を支援する目的で設立されたボランティア団体「KOKORO-NET in 神戸」（ココロネットと略称）を事例としてとりあげ、その成立過程、活動内容の実際、果たしている役割、大学との関わりなどについて紹介する。さらに、この団体の性質・特徴を整理し、団体が抱える課題について、運営面、組織面から指摘しながら述べる。

2. 団体について

2. 1. 設立過程と構成員

1996年、国際交流関係の仕事に就いており、留学生の家族の支援の必要性を感じていた神戸大学の一教員が、当時神戸大学大学院に在籍中であった者に声をかけ、団体設立のための準備会をスタートさせた。声をかけられた者（現代表）の夫は当時神戸大学の教員であり、指導学生として受け入れる留学生が彼らの帯同する家族について様々な問題を抱えていることを認知していたという。4か月の準備期間を経て、その年の11月に「外国人留学生・外国人研究者の家族との日常的な触れあいを通して、側面からの生活適応支援と相互理解をはかること（p.56）」（ココロネット10周年記念誌

編集委員会編、2007）を目的にココロネットを発足させた。

神戸市内案内とお茶の会からスタートしたプログラムは、参加する配偶者のニーズに応えながら、徐々に活動規模を拡大し、2009年現在では、交流プログラム（カフェ）と日本語講座の2本柱を中心に、各自の相談・依頼に応じるサポートなどを行っている。

また立ち上げ当初8名だったスタッフは、20名余りまで増えた。スタッフのうち約半数が、国際交流関係の職に就いていたり、配偶者が大学で教員として勤務した経験を持つ。1名を除き全員が女性で、年齢は50～60代が最も多い。スタッフ数はここ数年20名前後と固定しているが、スタッフ自体の入れ替わりはほとんどない。入会条件は特に定めていないが、入会に興味のある者は何度か参加してもらった上で、入会するか決めてもらい、その後スタッフミーティングで承認するという形をとっている。

2. 2. 参加者に対するプログラム

家族に提供しているプログラムのうち、開催頻度の高いものが「カフェ」である。これは神戸大学内外3か所で合わせて年間30回あまり開かれている。2006年度の活動記録は以下のようにになっている（表1）。日本の文化や社会について体験できる交流活動で、参加者による外国文化の紹介も行わ

表1 2006年度「カフェ」活動報告

場所	カフェレジデンス(神戸大学(インターナショナルレジデンス)	カフェキャンパス(神戸大学キャンパス内)	カフェなだ(兵庫国際交流会館)
活動内容	花見、歓迎会、お弁当作り、神戸空港見学、浴衣体験、生け花、お節料理、茶道、着物体験など15回	うちわ作り、浴衣体験、琴と尺八、着物体験の4回	花見、市内見学、料理、浴衣体験、工場見学、着物体験、酒造見学など10回
参加者(延べ数)	138人(うち子ども38人) スタッフ99人	67人 スタッフ38人	121人(うち子ども11人) スタッフ88人

れている。開催場所ごとの担当者が前年度の参加具合を見ながら年間計画をたてているが、家族のニーズに合わせてプログラムを計画することもあり、「お弁当作り」は幼稚園に通う子供をもつ配偶者から「日本人の園児と同じようなお弁当を作りたい」といった要望からできたものである。開始当初は、インターナショナルレジデンス（神戸大学の留学生寮）における活動のみであったが、1999年9月からはJASSO（財団法人日本学生支援機構）が運営する兵庫国際交流会館、2006年5月からは神戸大学六甲台キャンパスにおいてもプログラムを提供している。

日本語講座は、来日したばかりの配偶者にとっては、日本語を学習できる貴重な機会である。学内外2か所で行われており、初級Ⅰ（入門）、初級Ⅱが行われている。配偶者が日本語講座に参加できない理由の一つに、子供を預けるところがない、ということがしばしば挙げられるが（渡部、2008）、どのような配偶者でも参加できるようにベビーシッターサービスを提供しているのが特徴的である。

その他の支援プログラムとして「サポート」がある。これは、留学生やその家族から支援の依頼があったときに、可能な者が支援を行うというものである。例えば、病院、保健所、区役所、銀行、郵便局、学校、幼稚園、保育園などへの付き添い、通訳、翻訳などである。特に留学生の家庭の子供は、保育園から小学校に通う例が多いため、学校で配布される手紙の内容が読めなかったり、日本の文化を知らないことから理解できないこともある。家族から個別に依頼

がきた場合は、ココロネットのメーリングリストを通じて連絡を行い、担当者を決め、支援を行い、報告をするという形をとっている。また、2002年からはココロネット主催で年に一度、バスツアーを開催しており、これまで奈良、姫路、淡路島、広島、京都などに旅行に行っている。家族が楽しみにしているイベントであり、募集後、定員がすぐに埋まるほどの人気がある。

2. 3. その他の活動

その他の活動として、諸機関へのイベント参加、諸機関への留学生家族の紹介、研修会がある。イベント参加は、JASSO 主催の兵庫国際交流会館で行われる文化祭への喫茶コーナー出店（2000年～）、神戸大学新入留学生のためのオリエンテーションでの喫茶コーナー出店（2006年～）、神戸大学ホームカミングデーでの山口誓子記念館にて行われるお茶会の主催（2008年～）などである。いずれも毎年継続して行っており、ココロネットを様々な人に知ってもらうよい機会となっている。

諸機関への家族紹介は、阪神地区における中学校、高校が行っている国際理解教育プログラムや自治体の国際交流プログラムなどへ講師として家族を紹介、FMラジオ番組のゲスト出演者として家族を紹介することである。こちらは、留学生の家族を地域に知ってもらうという利点のほかに、家族にとっては、地域住民との交流ができるだけでなく、自国の文化などを紹介することによって自分の存在意義の再確認や自信に繋がる効果があると考えられる。

研修会は、他のボランティア団体を招い

での情報交換会、スタッフによる様々なテーマの講演、留学生や留学生家族による母国紹介などである。これらを通してボランティア活動の在り方を見直したり、留学生やその家族のニーズや背景を勉強したりし、ココロネット側の一方的な支援活動にならないように努めている。

2. 4. 団体の運営・方針

ココロネットは、国立大学法人神戸大学内(個人研究室)に事務局が置かれている。運営費はスタッフによる会費、諸団体からの助成金や個人の寄付などによって賄われている。2006年からは神戸大学留学生センターの予算から一部のプログラムに対し、講師交通費として支援を受けている。

ココロネットの基本的スタンスとして、「市民レベル」、「全員参加」、「日本語」の三つが掲げられている。「市民レベル」というのは、スタッフはあくまでボランティアであり、市民として市民の視点に立った活動を行い、サービスを提供する、という姿勢のことである。しかしだからといって、スタッフが専門性をもっていないわけではない。日本語講座を担当するスタッフらは日本語教師として長い経験を持ち、現役で大学や日本語学校で教えている者であり、カフェで行う着付け、生け花、なども心得のあるスタッフが講師として担当している。しかしながら、自分たちでできないものは無理をしてまでしない、自分たちでできるものをできる範囲で提供する。それ以上でも以下でもないのである。

「全員参加」というのは、文字通りスタッフ全員が参加するというものであるが、これは全員が強制的にプログラムに参加、

ということではない。全員で意見を交換しながら、知恵を絞り合いながらプログラムを作り上げたり、問題について議論をしたり、とスタッフの意見を取り入れながら納得する形で運営を行う、という意味である。ただ、年を経るにつれて、ニーズが増え、2000年に入ってから、活動日数が年間70～100日を数えるほどになった。そこで、活動を部門化し、役割分担を明確にすることにした。現在では、カフェ、日本語、サポート、会計、広報、バスツアーなど部会ごとに担当者を設けている。各部会の代表が年に6回スタッフミーティングで集い、運営について議論・報告を行っているが、そのミーティングの報告はスタッフのメーリングリスト上で行っている。

発足当時に比べてプログラムの数は増えているが、スタッフの入れ替わりはほとんどない。これについて、ココロネットの代表は「女性がたくさん集まると、陰口をいったり、派閥ができたりすることがあるが、そういったトラブルがない。グループの心地よさがある。今のメンバーは得がたい。すばらしい」³と述べており、スタッフ同士の関係のよさが退会者の少なさに繋がっていると考えられる。また、スタッフの入会の経緯をみると、他のスタッフに勧められたこと、スタッフ同士が以前からの知り合いであったこと、であり、これらも活動の継続に関係していると考えられる⁴。さらに、「ココロネットで得たものは」という問い⁵に対する答えとして「日本人の友人ができた」と回答している者が14名中13名おり、「外国人の友人ができた」(11名)、「外国の文化や外国人について知ることができた」(11名)を押さえてトップである

ことから、スタッフ同士の良好な関係が読み取れる。

「日本語」は、参加する家族に対しては日本語でコミュニケーションをとる、というのが基本的なルールとなっていることである。来日当初の、日本語のできない家族に対しては、英語や中国語のできるスタッフが会話をすることもある。しかし、日本で生活していく家族にとっては、日本語が上達しないと生活面、対人面などで支障をきたし、それが日本における異文化不適應にもつながりかねない。スタッフの多くが外国での生活を経験しており、言語運用能力がどれほど重要で不可欠なものであるかを十分に知っており、あえて日本語を使うように心がけているのである。多くの留学生の配偶者は、半年から1年くらいすると日本語能力が向上し、なかには大学に通う夫(妻)より流暢な場合もみられる。このような基本姿勢を貫いているため、当然ながら、英語を話したい、語学の練習のために、という動機で入会をする者は定着しない。

3. 団体が果たす役割

ココロネットが果たしている役割は、大きく三点ある。一点目は、家族への直接的な支援である。大学や地域自治体で提供されている多くのイベント、プログラムは留学生のみを対象としており、家族が共に参加できるものは限定されているのが実情である。また、配偶者のなかには、自分の夫や妻が通う大学キャンパスに足を踏み入れたことさえない者が多い。ココロネットは、こういった問題について対応しており(神

戸大学キャンパスツアー、家族で参加できるバスツアー)、大学主催では実施が困難な部分を担っているといえる。

さらに、家族のメンタルヘルス面でも貢献しているといえる。瀬口(2006)は「(ココロネットの)さまざまな活動の展開は、深刻な異文化不適應を起こさせないための『予防的措置』とも言えます。夫(妻)が、夜遅くまで大学で研究に没頭している傍らで、配偶者が新しい人間関係を築けないまま、異文化の中で孤立してしまうことを防ぐための環境作りの一環を担っているのです」と述べている。ココロネットへの活動の参加により、ネットワーク形成、友人作りなどを行ったり、自分の「居場所」を確保できる効果があると考えられる。

二点目は、留学生の家族の地域への橋渡しである。留学生よりも留学生家族のほうが地域で暮らす時間が長く、行動範囲は広い。上述したように保育園、幼稚園、小学校などに通う子供のいる家族の支援を行ったり、他の国際交流関係のプログラムへの紹介、また、スーパーマーケット、病院などの施設訪問をすることで地域に外国人の存在を知らせ、外国人が地域で暮らしていくなかでどのような点において不便を感じているのか、困っているのかについて知ってもらう機会を提供している。このような活動を通じて、地域において外国人を受け入れやすい環境の整備や、地域住民の国際・多文化理解に繋がると考えられる。ココロネットの活動の地道な努力は地域で認められ、2002年には、ウィメンズ・フェローシップ2002「シャルレ女性奨励賞ファイナリスト表彰」、2004年には、神戸市社会

福祉協議会「理事長表彰」、2009年にはコープこうべ虹の賞「功労賞」などを受賞している。

三点目は、大学国際化への貢献である。『神戸大学「国際的な連携および交流活動」評価報告書』（大学評価・学位授与機構編、2004）において、「教育・学生交流」と「外国人留学生等の生活支援」の両分野で、ココロネットは地域ボランティアとして高い評価を受けた。ココロネット設立当初は、日本語講座の教室や資金援助について神戸大学からの援助は困難であったが、数年前からは、これらの提供を受けられることになり、最近では大学から活動の依頼があり、互いに協力しながら大学の国際化推進に貢献している。2009年10月31日には、神戸大学学長からココロネットの活動について感謝状の盾が贈られるなど、神戸大学ではココロネットの活動が認知され始めている。

4. 団体が抱える課題

最後に、ココロネットが抱える問題、課題について述べる。

4. 1. 運営上の課題

スタッフに対して実施したアンケート⁶のなかで、ココロネットの運営面の課題について聞いた質問では、以下のような回答結果が出ている（表2）。

表2 ココロネット運営上の課題(N=14, 複数回答)

項目	人数
資金面	12
人材(メンバーの確保)	7
大学との関係(認知、連携)	7
プログラムの充実(内容、場所、回数等)	5
会員のスキルアップ(研修開催、語学能力等)	5
プログラムの広報(ポスター、HP)	4
参加者のフォロー	4
会員間の連携	2

最も多かった資金面であるが、これは既述したように、ココロネットの運営は、会員の会費(年会費2000円)、助成金、寄付金で賄われている。ほとんどのプログラムは無料で提供しており、参加費をとるプログラムについても、日本語講座では教材費として半年間に1000円、カフェの生け花の場合は300円など、参加者がわずかな費用で参加できるよう、ココロネットがそれ以外に係る経費を負担する形をとっている。現在はスタッフの交通費は全額支給されているが、以前は、支給が半額であったほどである。毎年安定した財源を確保することは、大きな課題となっている。財団などからの助成金は、ココロネットの代表が、助成金の募集を見つけてきては申請をしているが、「当たればラッキー」という状態である。年に一度のバスツアーについても、参加費を廉価に設定しているため、助成金が当たらなければ開催は中止となる。2009年度は前年度にどこからも助成を受けることができず、中止となった。

人材についても課題の一つである。年を経るごとに、ニーズが増加し、プログラムも増えてきた。これまで、メンバーの入れ替わりが少なかったことは、スタッフ間の連携の強化、「阿吽の呼吸」で活動が実施可能という効果を生んできたといえるが、同時にそれは「高齢化」、「後継者不足」、そこから派生する種々の問題の発生という結果をもたらした。スタッフの多くは、子育ての終わった世代であるが、親の介護、配偶者の看護、子供の就職、など新たな問題が発生する時期でもある。また、発足時から10年を経ると自分自身の体力などにも限界を感じることもある。このような状態

で20名余りいるスタッフの何人かが、中長期間活動を休む事態が起こっている。そうになると、他のスタッフに負担がかかってしまう恐れがあり、活動の縮小、一部プログラムの中止とならざるを得ない。上述したバスツアーは、財源だけでなく、この担当になるスタッフの負担⁷があまりにも大きいため、他の担当と掛け持ちをするのは難しく、中止となった要因の一つである。さらに、日本語講座で謳っていたベビーシッターについても、参加者が子供を連れてくるかこないか毎回予測が不可能であり、そのために、時間を割いて準備することが大きな負担となることから、今年度からベビーシッターは「要相談」という形に変更をし、カフェについても年間開催数を減らすこととした。

スタッフの数については、「たくさんいてもしょうがない」、「できるときにできる形で参加できるようなのでいい」というスタッフの意見もある⁸。ココロネットはそのときにできることを考えながら活動をするという「市民レベル」のボランティアであるものの、毎年バスツアーを楽しみにしている参加者のことやスタッフの活動貢献率によって年間計画が毎回変更してしまうことを考えると頭の痛い問題ではある。

4. 2. 組織上の課題

阪神大震災が発生した1995年は、多くのボランティア団体が発足・活躍し、ボランティアに対する関心の高まった「ボランティア元年」であり、ココロネットがその翌年発足したのも、偶然ではなく必然・当然であったのかもしれない。震災救援活動で

は、多数のボランティア団体がネットワークを通じて行政との連携を試みた(立木、1997)。ボランティア団体(インフォーマル組織)と行政(フォーマル組織)との連携は、ボランティア活動の実行にはある意味不可欠である。それは、ボランティア団体は、行政から必要な情報の提供を受けることが必須であり、行政にとっては、ボランティアに頼らなければできない活動も多々あるからである。

ココロネットに置き換えてみると、フォーマル組織に当たるものが大学機関であろう。ココロネットは大学から留学生の家族についての情報や活動場所、資金の提供を受け、広報も行ってもらっている。大学は大学独自の予算や人材では賄えない部分の活動をココロネットに委託し、大学国際化に貢献してもらっている。どちらが欠けても実施は不可能となり、強固なネットワーク、連携が必要である。

ところが、フォーマル組織とインフォーマル組織は、両者の組織論理の相違により往々にして緊張関係に陥ることがあるという。つまり、両組織があまりにも密着しすぎると、フォーマル組織がインフォーマル組織を取り込んだり、排斥したり、あるいは、両者間の決定的な衝突が起こりかねない(立木、1997)。立木はこれを「山嵐のジレンマ」と呼んでいるが、ココロネットと大学の関係も一時そういった事態に陥ったことがあった。それは、既述した『神戸大学「国際的な連携および交流活動」評価報告書』のところに、ココロネットの活動の紹介と評価が掲載されたことに端を発した。その当時は、大学から交通費などの援助が

なされておらず、大学からはココロネットの活動がそれほど理解されていなかった時期であった。にもかかわらず、そのような報告書に掲載されたことに対し、一部のスタッフからは「無断でココロネットの活動を掲載した」、「私たちの活動が大学のいいように使われている」といった批判が飛び出し、大学から距離を置くためにNPO法人化することが提案された。最終的に、NPO法人化の実現が困難なこと、同時期に大学からココロネットの活動に評価が出始めたこともあり、法人化は行わず、これまでどおり大学と連携していくことで決着した。しかし、アンケート結果にも表れている通り、大学との連携については現在も課題であると多くのスタッフが感じているようである。

それではインフォーマル組織としての意識がスタッフ間でどうなっているのか、については、個々の思いはそれぞれであると推察される。それが表面化したのは2007年に発行した10周年記念誌作成についての議論を行ったときであった。10周年記念事業として、またココロネットの活動について広く知ってもらうため、一部のスタッフが記念誌作成を提案したところ、ほとんどのスタッフから反対意見が出された。代表は当時のことを「スタッフのなかには、PRするために活動しているわけではない、対象が喜んでくればそれでいいのではないか、と考えている人がいる。現場で満足しているのか。今まで以上に仕事が増える、忙しくなる、と思ったからか」と語った⁹。また、記念誌の編集に携わったスタッフの一人は、「実際は手伝ったが今でも『もっと他にしないといけないことがある』と思っ

ている」と述べた。スタッフのボランティアに対する考えや思いは様々であろうと推察されるが、これについては更なる調査が必要である。

5. おわりに

以上、神戸地区を中心に活動している国際交流関係のボランティア団体を取り上げ、その歴史、活動内容、役割などについて紹介し、最後に団体がもつ課題について述べた。日本政府による留学生受け入れ政策の変遷、留学生の増加・多様化、大学の国際化などに伴い、留学生の家族を取り巻く状況は変化してきている。それに従い、家族への支援内容、方法も彼らのニーズに合わせて対応しなければならないのは当然である。いずれにせよ、ココロネットのようなボランティア団体の活動は、大学が「ソフト面や制度の隙間など、大学として『できない部分』(p.13)」(瀬口、2007)を埋めていくために今後ますます必要となってくるだろう。それをフォーマル組織として連携・支援していく大学機関が、留学生施策を立てていくなかで、ボランティア組織の実態、ボランティア個々の思いを知ることが重要であると考えられる。

〈注〉

1. ここでいう留学生とは、「出入国管理及び難民認定法」別表第1に定める「留学」の在留資格（いわゆる「留学ビザ」）により、日本の大学（大学院を含む）、短期大学、高等専門学校、専修学校（専門課程）及び我が国の大学に入学するための準備教育課程を設置する教育施設において教育を受ける外国人学生をいう。）

2. URL:
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouiku_kondan/matome.pdf

3. 2008年4月に行ったインタビューより

4. 2006年11月に行ったスタッフへのアンケート

- トより
 5. 4に同じ
 6. 4に同じ
 7. 当日だけでなく、下見、バス会社との交渉、訪問先でのボランティアの交渉など事前の準備作業が膨大にある。
 8. 2008年4月に行ったスタッフ2名のインタビューより
 9. 3に同じ

〈参考文献〉

- 北澤勝親 (1996) 「外国人留学生とその家族・友人のための日本語教育の実践」、『信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター紀要』、No. 4、pp. 119-128
- ココロネット 10 周年記念誌編集委員会編 (2007) 『10 周年記念誌 KOKORO-NET in 神戸』
- 小山悟・古賀富美子 (1997) 「九州大学における新しい日本語教育の試みー留学生の家族のための日本語コース“会館日本語”の6ヶ月」、『九州大学留学生センター紀要』、第9号、pp. 193-202
- マーフィ重松・白土悟 (2001) 「留学生家族をいかに支援するかー国立大学の外国人留学生及びその家族に関する調査報告」、『東京大学留学生センター紀要』、第11号、pp. 79-105
- 岡崎智己 (1999) 「留学生の家族支援日本語クラスの今後に向けて」、『九州大学留学生センター紀要』、10、pp. 107-114
- 大橋敏子 (1997) 「外国人留学生の家族に関する調査」、『異文化間教育』、11、pp. 156-164
- 大西晶子 (2007) 「市民参加の交流活動の分析視点についての一考察」、『留学生交流・指導研究』国立大学留学生指導研究協議会、Vol. 10、pp. 85-93
- 大坂紘子 (2008) 「中高年女性のボランティア開始後のライフコースとネガティブイベントへの対処」、『社会心理学研究』、第24巻第1号、pp. 1-10
- 佐藤尚子 (2003) 「留学生配偶者のための特別日本語補講」、『千葉大学留学生センター紀要』、第9

号、pp. 77-83

瀬口郁子 (2006) 「留学生や外国人研究者の家族と『KOKORO-NET in 神戸』、『神戸大学工学振興会KTC』、62号、
<http://www.geocities.jp/kokoronetinkoube/index.html> より抜粋

瀬口郁子 (2007) 「多様化する神戸地区の留学生交流」、『留学交流』、Vol. 19, No. 6、pp. 10-13

妹尾香織 (2008) 「若者におけるボランティア活動とその経験効果」、『花園大学社会福祉学部研究紀要』、第16号、pp. 35-42

白土悟 (1993) 「留学生家族の受け入れ体制の構築について(1)」、『九州大学留学生センター紀要』、5、pp. 197-211

大学評価・学位授与機構編 (2004) 『神戸大学「国際的な連携および交流活動」評価報告書』

田北光子 (2004) 「長崎大学留学生家族に対する支援活動ーこの11年の歩みー」、『長崎大学留学生センター紀要』、第12号、pp. 59-69

立木茂雄編 (1997) 『ボランティアと市民社会ー公共性は市民が紡ぎ出すー』、晃洋書房

渡部留美 (2008) 「滞日外国人留学生の帯同配偶者の現状ー配偶者へのインタビュー・アンケート調査からー」、『留学生交流・指導研究』国立大学留学生指導研究協議会、Vol. 11、pp. 133-143